年間第 25 主日　9 月 18 日　分かち合い

ルカ 16-13

今日、9 月 18 日は、国民の祝日―敬老の日の前日で、教会でも、敬老の祝福を行う日となっています。コロナの終息がまだ見込めず、しかも、大型で強い台風 14 号が接近していることもあって、雨が降り始めています。明日、米子で予定されていた、広島教区創立 100 周年の開年行事も、急遽変更となり、各小教区の 18 日のミサの中で祈るようにとの司教様からの通達が昨日届きました。

そうしたことで、落ち着かない日となりましたが、少し、心を落ち着けてみ言葉に耳を傾けましょう。今日の福音は、ルカ福音書の 16 章から取られています。この世に生きる弟子たち、また、人々に語られたイエスの言葉ですが、繰り返し出てくるのは、「管理者」という言葉です。「管理者」と言えば、会計や財務の仕事、お金や物の管理を任された人と考えがちですが、もとの言葉、oikonomos (economus)はもう少し広く、家全般の世話をする、家の責任を任された人を指す言葉のようです。

前半の話では、イエスは、多額の資産の管理を任されていた管理者が、ひそかに行っていた不正を告発されながら、姑息な手を使って何とか生き延びた話を例に、より値い高い永遠の富を委ねられたものが、心すべき教えを説いておられます。

そこで打ち出された考えの一つは、「小さなことに忠実なものは、大きなことにも忠実である」という言葉です。小学校の時に聞いた、「小事に忠なる者は大事にも忠なり」は今でも忘れられません。ごく常識的な教えとも取れますが、この世における富の大小の問題ではなく、この世の富と、それと比較できないほど大きな天の富を対比しておられたのでしょう。天の富について教えられたものが、とかく、この世のことをおろそかにすることへの戒めなのかもしれません。「不正にまみれた富」とは、不正な手段で手に入れた富のことではなく、「この世の富」そのものを意味します。この世の富、神から与えられたもの、に忠実でなければ、どうして本当に価値あるもの、天の富をいただくことができましょうか。

しかし、最後に加えられた言葉、「どんな召使いも二人の主人に仕えることはできない。・・・あなたがたは、神と富に仕えることはできない」、を忘れてはなりません。結局、「この世の富」、そして、それに対する忠実を大事にするとしても、唯一の主である神を忘れることは決してあってはならない、という強い教えではないでしょうか。

今日は「敬老の祝福」の日です。高齢者の皆さんは、長い人生の間、様々な経験を積んでこられました。うれしいこと、楽しいこと、感動されたこともたくさんおありだったでしょう。同時に、辛い経験、忘れたいと思っても忘れられない苦い経験もあるかもしれません。その中には、この世の富にかかわることもきっと多くあるでしょう。しかし、今、その大きな務め、責任から解放され、もっと、心を天の富に向けるときかもしれません。この世の富から、解き放たれ、変わることのない富、永遠の富である、神ご自身に一歩近づく大事な時です。教皇フランシスコは、今年の「祖父母と高齢者のための世界祈願日」のメッセージの中で、「年を取ることは、呪いではなく、祝福です」と言っておられます。そして、「わたしたちが手にした最も尊い道具、わたしたちの年代にもっともふさわしい道具を、もっとたくさん、もっと上手に使うことを覚え、それを果たしていきましょう。その道具とは、祈りです」と。今までお受けになった数限りない恵みに感謝しながら、一層神を賛美する日々、そして、人々のために祈る日々を送ることができますようお祈りしながらミサを続けましょう。

(S.T.)